
約束～舞い散る桜の木の下で～

青海空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束～舞い散る桜の木の下～

【著者名】

NO8585

【作者名】

青海空

【あらすじ】

こんなにも弱虫な僕と一緒にいてくれた君。
そんな君との別れの日が、やつてきた。

(前書き)

いつも、青海空です。

ふと、ある画像を見た時に、この画像をモチーフにした小説を書きたい！ という衝動に駆られ、書いたのがこの短編です。

最後まで読んでくれると、嬉しく思います = (_ _) m

「どうかした？」

薄桃色の桜の花びらが舞い散る中。

橋の手すりに両腕を乗つけて、こちらを覗き込むようにクスクス微笑んでいる君は、凄く大人びて見えた。

橋の下では、桜の花びらを乗せた透明な川が悠然と流れている。

「綺麗だなって」

僕は空を仰ぎながら呟く。

どこまでも透き通るような、蒼天の空へと桜の花びらが舞い上がる情景は、儂いほどに美しかった。青と桜色が織り成す色のコントラストに、思わず目を背けたくなる。

「そうだね」

君も僕と同じように空を見上げた。

「ホントにそれだけ？」

でも、それも束の間。

君は僕の方に向き直つて、いたずらっぽく笑つた。

どうして君はいつもそんなんだろ？

僕の思つてることなんか全てお見通しじて、心の隙間にすりと入つてくるんだ。

「……本当に終わつたんだなって」

「いや、現実を口に出した途端、目頭が熱くなつてきた。

どうしよう。さつき、あんなに泣いたのに……また、僕は泣いてしまうのか？

「弘樹はホント、泣き虫だね」

「う、うるさい」

目に涙が溜まつてゐるのに気付いたのか、君があきれたように指

摘する。

僕は手を「シゴシ擦つて、無理にでも涙を拭き取った。

「さつき、あんなに泣いたじゃん

さつき。

それは、卒業式のことだ。僕達が通っていた高校の、卒業式。

「私たちの決別は、卒業式でやつたはずだけど?」

『決別』

その言葉が、僕に重くのしかかる。

そう。

君とは、今日を以つてさよならなのだ。

あれ……

僕の頬を涙が伝つていた。

拭つても拭つても、湧き出るようになに流れる涙。

「弘樹」

「ごめん、わかつ、てるんだ。わかつてるのに……涙が、止まらない

くて

何を言つてるんだ僕は。

ホントはわかつてなんかいなくて

君がいなくなる。

その現実を認めてなんかいなくて

「弘樹」

「！」

ふと、僕の体を温かい何かが包み込んだ。

「落ち着いて、弘樹」

僕の耳元で君が囁く。

ああ。何て……

何で、落ち着くのだろう。君の温もりを感じるだけで、こんなにも安心していられる。

「大丈夫。また、いつか会えるから

幼い子供をあやすよつて、君は僕の背中をポンポン叩く。

でも

だからこそ、この温もりを失いたくなかった。僕は君の背中に腕を回して、その体を強く抱きしめる。

「痛いよ弘樹」

「うん」

それでも僕は、力を緩めたりはしなかった。

君も、あきらめたように「仕方ないなあ」なんて、文句を垂らしている。

「弘樹。 そろそろ……」

君の別れを知らせる言葉に、僕は胸がキュッと締め付けられるのを感じた。

「弘樹」

名前を呼ばれ、力を緩めていなかつたことに気付いた僕は、ゆっくりと君を離した。

卒業式が終わったら、この街を出て行く。

そう君に告げられたのは、卒業式の一週間前のことだった。

「え？」

いつも通り、君と並んで帰路を歩いていた時だった。

君が言ったことが信じられなくて、僕は思わず聞き返す。

「私、この高校を卒業したら街を出るの」

だが、聞き返したところで何も変わらなかつた。君は同じことをきつぱりと言つた。

「冗談、だよね？」

「冗談じゃない。ホントのこと」

君の目は、とても嘘を言つてこないよつには見えなかつた。

「卒業式が終わつたら、そのまま行くから」

僕は何も言い返せなかつた。

僕が何と言おうと、その事実を変えること出来ないと、心のどこかでわかつっていた。。

「あと、1週間」

「うん。あと1週間」

「ねえ

「ん？」

「学校サボつて遊びに行こいつ」

僕の提案に、君は驚いたように目を見開いた。

「真面目つ子な弘樹が、そんなこと言つなんて」

「いいんだ。もう高校は決まつてるので、学校なんて行かなくてもいいから」

それに、学校にいる時間と、君といふ時間のどちらが大切か、なんて迷うはずもなかつた。

「卒業式までの1週間。僕と学校サボつて、遊びに行こいつ」
君はそんな大胆な僕の提案に、ふふっと笑つて見せた。
「勿論、喜んで」

そして、僕らの最後の一週間が始まった。

水族館、動物園、映画、遊園地、野球観戦、植物園……典型的なデートスポットに毎日のように一人で出掛け、時には旅館に泊まつたりした。

こんな毎日がいつまでもいつまでも、続いたらしいの。こんな楽しい日々が、いつまでもでも、そんな日々に終止符を打つ日がやがてくることになら、抗いようがなかつた。

卒業式の『仰げば尊し』斎唱の時、僕は人目を憚ることなく、ガキのように泣きじゃくつた。

「それじゃあね」

君は僕の傍を離れ、俯きながら僕に背を向けた。

「ねえ！」

僕はその背中に思わず叫ぶ。

余りにも、君の態度が淡々としていたから。

君は僕に背を向けたまま、その場に立ち止まった。

「どうして、そんなに平静でいられるの？ 僕と離れ離れになるのは、嫌じゃないの？」

「…………」

君は僕に背を向けたまま、何も言わない。

「ねえ！」

「そんなの、嫌に決まってるじゃない！」

「！」

君が僕に、初めて感情を露わにした瞬間だった。
君の瞳からは、涙が溢れていた。

「弘樹は弱虫だから……だから、私が落ち込んでちゃ駄目だから……だから、必死に弘樹の前では笑つていようつて決めたんじやない！」

僕が

僕が弱虫なばかりに、君は無理していたというのか。

僕が、君を苦しめていたのか……？

「ごめん」

「……馬鹿」

「ごめん。僕が弱虫だから、君を苦しめてたんだね」「それは違うよ」

君は涙を指先で掬い取りながら、頬を歪ませた。

「私は、弘樹の弱虫なところを含めて、弘樹のことが好きなの……好きになつたの。わかるでしょ？」

君は涙目で、僕に微笑んだ。思わず、僕は頷いてしまう。

「それじゃあ、ホントに行くね」

君は名残惜しそうに、手を振つて僕に背を向けた。

「ねえ！」

君はこっちには振り返らない。でも、それでも構わなかつた。

僕はそのまま続けた。

「もつと強くなつて、君を迎えて行くから！ 何年かかるかわからないけど、お金貯めて君の元に行くから！ だから、それまで待つてて！」

君は肩を震わせる。

「次に会う時は、君が甘えられるくらい強くなつてるから！ だか

ら、待つて！」

僕の宣言に、君はゆっくりと振り返ると、

「待つてるー！」

涙を浮かべながら、君は満面の笑顔を咲かせた。
満開の桜にも負けないくらい、大きな笑顔の花を

*

あれから、5年の月日が経った。

長かった。ホントに、ホントに長かった。

親の反対を振り切って大学に行かず、ひたすらバイトに明け暮れ
た。

早朝からバイトに出掛け、夕方の6時頃に家に帰り、泥のようにな
眠る。

そんな日々をひたすらに繰り返すことを、1年以上続けてきた。

飛行機が空港に到着し、キャリーバックを受け取ってから、エン
トランスの方へ向かう。

君には既にメールを送つて、この飛行機に乗る旨を伝えたんだけ
ど……

僕は周りを見渡して、君の姿を探し求めた。

「弘樹！」

僕は思わず笑ってしまった。

5年も経つたのに、全く変わっていない声。

それが何となく嬉しかった。

容姿はどうなんだろう?

昔よりも綺麗になつたのかな? それとも

僕は声が聞こえた方

後ろをゆっくり振り返つた。

ſ fin ſ

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございます！！

最後の1週間を、簡単に終わらせてしまってすいません。
短編ですので、省略してしまいました(汗)

いかがだったでしょうか？

感想、批評など、書いていただけすると凄く嬉しいです(^ ^)
評価点を付けていただけるだけでも、凄く励みになりますので、よ
ろしくお願い致します m(— —) m

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0858s/>

約束～舞い散る桜の木の下で～

2011年3月31日17時10分発行